The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	英国二十世紀における血液型を巡る社会史
Author(s)	香戸, 美智子
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61446
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　香戸　美智子　）	
論文題名	英国二十世紀における血液型を巡る社会史

論文内容の要旨

本論文の目的は、二十世紀初頭に報告された血清学上の発見である血液型という科学知識および関連の技術をめぐり、英国において科学と社会がいかに共生成をしていったかを、ジャサノフによる共生成イディオムを援用しながら、歴史的観察により明らかにしようとしたものである。英国がなぜ独自の血液型研究の志向を生み出していったのか、それはどのような文化的・社会的背景を持ち、またどのような社会組織と文化の発展を促したのか、について、主に文献・資料調査に基づいて解明するものである。

第1章では、血液型や英国についての問題意識を述べた後、科学と社会に関する研究史を概観し、ジャサノフの共生成の枠組みに関して提示した。第2章では、前史としてヒルシュフェルトによる民族指数の提唱からその世界的影響に至る一連の流れを概観した。第3章では、英国での血液型とヒト集団に関する研究がいかに始まりどのように発展したかを科学者コミュニティの形成とともに捉え、特に科学者ロバーツの研究を取り上げて、ウェールズという集団としてのアイデンティティ希求を歴史的背景や名字法とともに詳述した。第4章では、国際的な人種観の発展の中で国際社会と英国人科学者の思想的交差や葛藤、また英国内部での新たな研究をめぐる事象および発展過程を考察した。第5章では、一連の研究を試料として支えた輸血サービスについて、前章までの接点、血液型の知識により実用化された近代的輸血技術、世界で最初に開始されたボランタリーなドナーの誕生と形成、新たなる発展などを詳述した。以上により英国の血液型を巡る社会史をまとめた。以下、章ごとに内容を詳細に提示する。

第1章では、まずラントシュタイナーにより発見された血液型がヒトの血球と血清に組み合わせによって凝集反応の有無があることから「ヒトを一定の群に分けることができる」という血液型の集合性が社会や人間における集合性と強く親和性を持つのではないかという推測とともに、英国における事情として歴史的起源が異なる民族の連合王国であることなどを考察の前提とした。続いて、クーンを端緒とする科学と社会の研究史をエディンバラ学派やアクターネットワーク論、科学論と社会論との軋轢などを概観した。ジャサノフは現在、科学技術社会論者に位置するが、近年学際的に多様化する内部の状況および社会理論との距離を縮めるために通底する理論として共生成イディオムを主張している。それは自然秩序と社会秩序が同時に共に生産され、二様の動態が不可分であることを示す。科学知識・技術は、社会的実行・アイデンティティ・規範・慣習・言説・手段・機構を埋め込み、またその社会的なものに埋め込まれていることを論じた。研究が集中する中心的領域、創発的側面として 1.新しい対象と現象の出現および安定化 2.コンフリクトの解決に関わること 3.時空や制度の境界を越えた可動性をもつプロセス 4.科学知識・技術の文化的な実践が挙げられる。また共生成は秩序化する道具として空間、特定の経路に沿って発生し、秩序形成的側面としてそれらは 1.アイデンティティを作ること 2.制度・組織を作ること 3.言説・言葉を作ること 4.表象を作ることである。これらの枠組みを援用し、歴史上の事実情報の収集は文献・資料調査に基づき行った。また関連する諸概念として人種概念の変遷やインフラストラクチャーの用語および先行研究についても確認した。

第2章では、英国血液型研究の前史とも言うべき、血清学者ヒルシュフェルトによる生化学民族指数の提唱から世界的影響に至るまでの一連の流れを概観した。第一次世界大戦時サロニカでのヒルシュフェルト夫妻の経験は血液型知識と様々な民族との出会いでもあり、血液型頻度により人種を分類する研究の起点となった。16集団においてヨーロッパの北部/西部からアフリカ・アジア地域の南部/東部へ移動するほどA・B因子の出現率が変動（減/増）することが発見された。ここで生み出された民族指数という科学的言説によって、凝集反応の相違による血液型の分類と特に人種・民族などのヒト集団の分類が強く親和性を持つことになり、後に医学誌を通じて世界に急速に伝播した。国際的な伝播と受容についてはシュナイダーによる先行研究をとりあげ考察した。言説を作ること（民族指数）、表象を作ること（人種）が現れる。このような過程で血液型研究は出現から安定化へ、新たな血液型に関する人類学的研究の創出へと進んでいき、文化的実践への道を開いた。民族指数はヒト集団との親和性ゆえに社会的・政治的な影響をも生み出した。例えばドイツではアーリア人を筆頭とする人種序列化に利用されたことに典型的に見られるように、血

液型の知識は世界に拡散する中で、それぞれの文化的・社会的文脈の中で個別・独自の表象を生み出し、個々に特有のアイデンティティも担いながら発展していった。

第3章では英国における知識の現れと独自のアイデンティティ希求について考察した。前半では、英国で血液型とヒト集団の研究がどのように始まり発展したかを追った。立ち上がりは遅く1930年代半ばに血液型研究所が設立された。研究推進の原動力となったのは遺伝的要因を重視するゴルトン優生学の伝統であり、英国の特徴として血液型研究はホールデンやフィッシャーらの統計学者・人類遺伝学者によって先鞭がつけられ、科学者コミュニティが形成されたことがあげられる。イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドの4地域から形成された英国において、人種とはこの4地域のヒト集団であり民族意識探求の初動の研究を考察した。後半では、血液型研究とアイデンティティ希求が一体となった顕著な例として、ロバーツのウェールズに関する研究を取り上げた。彼の学位論文を含め主に血液型に関わる論文資料にあたった。当時のウェールズ人への蔑視や偏見への払拭が研究動機ともなった。社会背景として二十世紀前半のアイルランド南部の独立とともに、ウェールズでも国民党が結成され経済的不況と失業増への不満とともに独立の気運が高まった時期であった。ロバーツはウェールズの血液型頻度の南北差を発見し、南部はイングランド、北部はむしろスコットランドやアイルランドと同程度、つまり「想像される同族集団」であることを証明し、自らケルト系地域の連帯を意識しながら研究を進めたことがわかった。研究方法としてグッピー家名辞典を使用しウェールズ独自の名字を分類調査したことも特徴である。ウェールズ名字は元のカムリー語の父称形式表記がイングランド化・英語化により半ば作られたものであったが一方で遺伝的調査には有効であった。

第4章では、国際社会と英国科学者および英国内部での研究をめぐるコンフリクトを中心に、英国の研究の特異な発展過程を文献資料にもとづき詳述した。ヨーロッパで十七世紀頃から形成された人種概念は、十八～十九世紀における分類から計測への傾斜そして二十世紀前半までの頭蓋指数など科学的人種主義を経て、1950年のユネスコ人種声明により大きな転機を迎える。ナチス・ドイツのホロコーストに対峙して人種概念の生物学的根拠を否定し、社会秩序と言説（人種否定）を作るものであった。しかし一部科学者コミュニティは反発しその意見は第二声明に反映され、科学者による批判や主張は別の小冊子にも収められた。これら主に3つの文献資料から、血液型研究に関わる英国の科学者の人種概念に関連する思想の先進性と伝統的思想の残存の交差を抜き出した。また当時国際社会では間接的に血液型研究が科学人種主義と同列視されたこと、ダーリントンなど英国科学者はアメリカやフランスと異なりイングランド人を人種と見なすなど植民地主義思想とは別の志向であることも捉えられた。後半では、上記と並行して戦後進められた新たな血液型研究所の設立および英国の人種多様性研究の発展を議事録等資料から読み取った。設立と活動の基礎となったのは英国医学研究協議会など広範な医学を対象にする団体および疾患団体からの豊富な資金および試料としての戦時中の献血記録であった。しかし人種の特定に不可欠な旧姓や生誕地の個人的データの不備やドナーの反発などの問題が起こり、研究は部分的に後退を余儀なくされたことも読み取れた。

第5章では、試料としても支えた輸血サービスについて、その世界に先駆け組織化された歴史を取り上げ、血液型という科学知識、輸血技術の発展とともに社会秩序が構築され、その中で新たなるドナーという存在が共に生産されていく過程を見た。第1に、血液型の知識により実用化された近代的輸血が第一次世界大戦を契機として普及し、クエン酸ナトリウムを用いた間接法によってドナーのより安全な広範囲な利用が可能となり、1920年代初期にオリヴァーにより輸血サービスが創設された過程を追った。前章までに見た血液型研究および研究者との接点として、ヴォーンを中心とするコミュニティの人脈、論文での試料記述などを資料から確認した。第2に、初期の発展として1920～1930年代と戦時を取り上げ、事例として初期の平時におけるドナーの記録物を分析した。証明書の文言（見知らぬ苦しむ人を救う等）から非対面式・匿名性・利他性が理解でき、医療側からの謝辞を伴う報告書からは平均輸血量・最多病名や輸血結果等の実態も判明した。次に戦時の緊急輸血サービスの組織化のため1939年に断続的に開催された会議を議事録より読み取り、戦時のドナーとの関係等も資料より整理し詳述した。第3に、新しいアイデンティティとしてのドナーが形成されていく過程をドナー団体の会報に着目して、平時の1930年代と1950年代に発行された資料を分析しボランティアドナーが主体化してゆくさまを追った。医療関係者や専門家とドナー間にラポール関係が構築され、1.無償の血液ドナーという自覚と誇り 2.社交と王室 3.表彰制 4.病院からの症例報告抜粋 5.血液・血液型知識の提供が読み取れた。第4に利他性に焦点をあて英国の福祉の土壌として中流階級の慈善にふれ、献血についてモースの理論を援用し福祉国家を論じたティトマスの贈与論を考察した。当時のアメリカ等の売血事情や経済的市場に対し社会的連帯や社会的市場が説かれた。戦後血液銀行が可能な時代に英国保健省の判断で輸血サービスは残され福祉国家に組み入れられた。様々な動機を持つドナーは新たなる表象を作ることとなった。

以上のような分析を通じて、血液型の知識と関連する技術は二十世紀初頭より急速に世界に拡がり、ヒト集団の表象を生み出し、英国内の民族との親和性とともに、輸血サービスやボランティアドナーの誕生を通して福祉の表象をも作り出し、科学知識と社会の共生成をもたらしたことが捉えられた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名	香戸美智子（英国二十世紀における血液型を巡る社会史）		
論文審査担当者		（職）	氏　　名
	主 査	教授	山中　浩司
	副 査	教授	Scott North
	副 査	准教授	森田　敦郎

論文審査の結果の要旨

本論文は、２０世紀初頭に生じた血液型に関する科学知識が、血清学の領域においてどのように発生し、その後人類学や優生学の分野に波及していったのか、また、そうした科学知識はどのような社会構造や秩序と連動しながら、それによって生み出され、同時にまた社会を生み出して行ったのかを追跡した野心的な科学社会学研究である。

血液型研究は当初から、輸血問題などのきわめて実践的な社会課題と結びつき、また研究の基盤としても軍隊などの大規模な社会制度と密接に関連して展開され、その後も人種や民族といった社会集団と関連して論じられることが多く、科学知識と社会秩序が不可分の形でからみあう事例として理解できるが、著者は、科学社会学においてはよく知られている科学知識と社会秩序の「共生成coproduction」という概念を用い、特にシーラ・ジャサノフの論考を参考としながら、一方における科学知識の出現・安定化、コンフリクト解決、可動性、文化的実践といった創発的側面と、他方におけるアイデンティティ形成、制度・組織の生成、言説の創出、表象の創出などの秩序形成的側面の双方を血液型研究の展開の中に見ようとしている。

著者は、まず、血液型研究のパイオニアの一人と考えられている血清学者ヒルシュフェルトの研究がどのような社会状況の中で行われ、それがどのようにヨーロッパ社会に波及したのかを、先行研究や自ら実施した学術雑誌の網羅的な分析から導き出している。とりわけ、ヒルシュフェルトが血液型の分布から構成した民族指数という概念から、血液型の分類と人種・民族などのヒト集団との関連性が浮上し、人類学、優生学、遺伝学に問題が波及した点、さらに人種や民族の序列化や再解釈が生じたことで、広範囲の社会文化的影響が生じた点を指摘している。こうした影響はヨーロッパ全域にわたり生じており、とくにドイツではアーリア人種の優位性を主張する人種イデオロギーに発展したことが注目される。

第三章では、血液型研究が社会集団の再解釈や再秩序化に関与したこうした問題について、著者は英国を事例としてより詳細な分析を行っている。血液型研究においては後発国であった英国においても、1930年代には、ゴルトン優生学の伝統と結びつきながら血液型研究所が設立され、人類遺伝学者や統計学者による科学者コミュニティーが形成されたという。大陸ヨーロッパにおける人種問題とは異なり、しかしながら、英国においては、イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドといった、国内の民族集団の関係性により多くの関心が集まった。その中でも著者は、フレイザー・ロバーツによる、ウェールズ研究を取り上げ、民族的アイデンティティと血液型研究の密接な関連性を論じている。著者は、また、第四章において、戦後の国際秩序において人種概念が再検討される過程で、英国の科学者たちがどのような態度をとったかを、それが英国における戦前の人種研究や戦時における献血記録などとどのように結びついているかを明らかにしている。第五章においては、英国に於いて世界に先駆けて整備された輸血サービスの社会システムが、血液型研究とどのように結びつき、科学知識を生み出したか、また、同時に科学知識によってどのような社会制度や倫理が形成されていったかを追跡している。この問題は、後に臓器移植制度や組織バンク制度のような、医療と医学の展開に重要な役割を果たす仕組みに結びつくことになる。

こうした分析を通して、著者は、英国を事例として、科学知識と社会制度がいかに相互に規定し合いながら、「共生成」されるのか、あるいは「共進化」するのかを明らかにしており、科学社会学の領域における重要な貢献を行ったと評価できる。また、血液型研究の科学社会史は、日本ではほとんど未開拓の領域であり、新たな研究分野の開拓という意味でも重要な業績であると考え、博士人間科学の学位にふさわしい学位論文と判断した。